

HERBERT GOTTSCHALK

Bertrand Russell : a life

小野修

—

本書は、最初一九六二年にドイツ語で書かれ、ベルリンで出版された。即ち、'Bertrand Russell eine Biographie' von Herbert Gottschalk, Colloquium Verlag Otto H. Hess, Berlin 45 がそれである。その三年後、これは Edward Fitzgerald によって英訳され、今年、一九六五年 John Baker Publishers Ltd, 5 Royal Opera Arcade, Pall Mall, London, S. W. 1. から出版された。頁数一二八、ジャケットの表紙は青地に黒で印刷され、ラッセル卿の近影が大きく刷り込まれている。筆者が読んだのはこの英語版である。

内容は、題名の示すように、バートランド・ラッセルの伝記である。従って、叙述はほぼ、時の経過を追ってなされているが、ラッセルの多岐にわたる活躍ぶりのため、問題別に、従って、時間的には並行した叙述もなされている。本書は十三の項目にわけられ、巻末に簡単なラッセルの年譜が付せられている。

書評

の項目を次に紹介することにより本書の概観をおおよそ伝えることができよう。

一 序文、二 家庭、少年時代と青春、三 社会主義と数学、四 政治と人々、五 ケンブリッジとハーバードにて、六 第一次世界大戦と刑務所、七 ソ連と中国への旅、八 著作と講演、九「実験学校」と教訓、十 米国における戦いの歲月、十一 平和と栄誉、十二 オーストラリアの日々、十三 水爆の衝撃。

ラッセルにかんする伝記としては、すでに、アラン・ウッドによって書かれた優れた書物があり、また、ラッセル自身の手になる自伝もあるため、これらを読了している人々にとって、ゴットシャルクの本書には、とくに新たに発見された新事実は呈示されていない。著者は、明らかにアラン・ウッドによる伝記を参照しているに相違ないにもかかわらず、ウッドの名、あるいはその著書については一言も論及していない。これはいささか公正さを欠いた執筆態度ではなからうか。ちなみに言い添えておきたいが、ウッドは、その伝記の脱稿の後、ただちにラッセルの総合的研究書の執筆にとりかかったが、不幸にも、その第二章の執筆中に急逝し、發揮されず終いとなった彼の蘊蓄は、ラッセル自身を含め、ラッセル研究者たちに大いに惜しまれたのであった。

* Alan Wood : Bertrand Russell, The Passionate Sceptic, 1957, George Allen & Unwin

二

以上のようなことをあらかじめ考慮に入れた上で読むとき、本書は色々な点で有益である。ウッドによる伝記やラッセルの自伝のもつ生き生きとした、眼に見えるような記述は、本書においてはとても期待することはできないが、ラッセルの思想と行動をそれぞれの時代的背景との連関において、簡潔に位置づけ、ラッセルの思想的発展の様相を飾り気のない、単純な文体において把握し、よくその本質に肉迫しているところは見事であると言わねばならない。ウッドやラッセルの著作における会話のやりとりや事件の描出は、(おそらく、引用にまつわる著作権のわずらわしさをさけるためであろうが)この書物においては、ほとんど原形を留めない間接話法や表現の中に閉じこめられてしまっている。しかし、そのために、読者は、かえって、より容易に、ラッセルの生涯とその業績についての大づかみの展望を得ることができると。こうした点は、事象よりむしろ原理的な論議を好むドイツ人らしい気質のあらわれとして、本書の利点を形づくっているように思われる。本書の簡潔さと対比しうるラッセルにかんする概説書は、アラン・ドワードの小著—— Alan Dward: Bertrand Russell, Longmans, Green & Co., 1951——があるのみである。しかし、ドワードの著作がラッセルの哲学、それも、とくに認識論、論理学の領域の解説に重点がおかれているのに対し、本書は、ラッセルの全活

動領域を時代的背景や交友関係まで含めて広範囲に論じて、ラッセルという人物をより明確に浮き彫りにすることに成功している。分厚いウッドの伝記を読む前に、この著作を読んで「ラッセル学」を志す人が新たに生れるかもしれないということは、大いにありうることである。

ウッドの伝記に散在するラッセルに対する冷静で、しかも勇敢な批判は、ゴットシャルクのこの本には見当たらない。本書は終始、ラッセルに対する大いなる畏敬の念をもって貫かれている。少くとも、そのことは、なまじ舌足らずの批判に終るよりも、はるかに気持のよいものであり、且つ、不当に歪められたラッセル観を読者に抱かせないという点で有益ですらある。このような慎重さは、かつて、アメリカで総合的なラッセル研究として、一九五一年発行されたシルプの編集による共同研究「バートランド・ラッセルの哲学」*の分担執筆者の一部、とりわけ、ラッセルの社会理論にかんする批判を試みた幾人の学者には欠けていたものである。彼らのあるものは、(その名をここで挙げる必要は全くないのだが)十分にラッセルの著作を読みもせずに、ラッセルを批判したために、巻末の批判への応答の頁の中で、ラッセルから侮蔑の念を込めて一蹴されたのであった。

* P. A. Schilpp, (ed.): The Philosophy of Bertrand Russell, 1951, Tudor Publishing Co., New York

三

ラッセルの学問的業績は、どの分野からでも論及できる。本書はその概説的性格から彼の全体像を描き出そうとしているが、すでにラッセルの生涯について前提的な知識を有するものにとつて興味を唆られるところは、ゴットシャルクがラッセルの思想的根幹をどう把握しているかという点であろう。筆者は、かねがね哲学思想と政治理論との連関について関心をもち、それについての論及も行ってきた「政治にかんする科学——認識と意志の問題」一一三、同志社法学九十二、三、四号」だけに、「社会主義と数学」と題された第三章は特に興味深かった。この章は、ラッセルの哲学を直接論じたものとしては、本書の中核にあたると言いうる。

ラッセルはすでにその自伝において、彼の生涯にわたる二つの関心を、大ざっぱに、抽象的なものと、具体的なものとにわけているが、その端的なあらわれが、彼の数学への憧れ——それはのちに数学の神秘をはぎとることで解消するのだが——ならびに、哲学への関心と政治をはじめとする社会的諸事実への関心であった。これらは、そのどちらかへの関心が他の関心をさそいだしたというのではなく、生れつき彼にそなわっていたと見ることができると。事実、彼の前半期の生涯の各時期は、この双方の分野に同時に彼の全力量が発揮されたのであった。——こうしたことを前提とした上で、ゴットシャルクの見解を次に

ごく簡単に紹介してみよう。

四

ラッセルはたしかに、はじめは自分の歩むべき道をどちらにすべきかを迷ったに違いないが、ゴットシャルクによれば、一八九五年ケムブリッジのトリニティ・カレッジの特別研究員になつて書いた「幾何学の基礎」がウオードやホワイトヘッドの賞賛を受けたために、哲学の研究に積極的に入ったという。もし失敗作であつたら経済学へ転換するつもりであつたのである。翌年には、ドイツにおける経済学研究の結実である「ドイツ社会民主主義」が出版された。「ゴットシャルクは同年としているがこれは誤り。なおこの書は一九六五年に復刊された」ところを見るとこの二つの全く性質を異にした著作が同時に書かれたということは注目すべきことである。一八九八年何年ぶりかであるヘーゲルを読み、とくにその数学にかんする叙述に失望し、G、E、ムーアの援けもあつて、観念論をはなれ、實在論へと転じた。ヘーゲルやブラッドレーの牢獄フロズから解放された彼は、空間と時間を何か正しく存在するものでもあるかのように喜んで享受し、結局数学は真であるにちがいないという考えにつき動かされた。ラッセルは「数学原理」の第二巻において、数学と論理学は同一であるアイデンティカルことを証明しようとした。これはペアノによつても同じ頃主張されていたものである。ラッセルの仕事に関心をもったホワイトヘッドと共に、ラッセルは「プリンキピア

・マテマティカ」の共同執筆にあたり、一九一〇年から十年をかけて完成した。ラッセルはこの共同著作において数学からその多年の神秘性をはぎとったが、彼の期待に反して、この本はその難解さの故に読まれず、類似の研究をしている専門家も殆んど読まなかった。ラッセルはこの新たな困難を記述の問題をまず解くことによって解決できると思った。たとえばマイノックの定式「黄金の山は存在しない」The golden mountain does not exist. という記述は、正確には、「黄金であって、しかも同時に山であるようなものは存在しない」Nothing exists which is at the same time golden and a mountain. というべきであった。彼の「記述の理論」(一九〇五年)はマイノックへの解答であったばかりか、哲学界での成功をかちえた。それまで一般には、文章の文法的と論理的構造は同じものとは考えられていなかったから、互いに一致できなかった。従って、マイノックの言う「黄金の山」は事実上存在せねばならなかった。言葉の意味連関によるかぎり、われわれは全く誤った結論に到達するのである。ラッセルの疑惑は、言葉はすべての場合、必ずしもはつきりまとまった不変の意味をもたないという仮説の上に立つものであった。

思考と存在するものとの調和は、言葉の正確な使用にかかっている。即ち。ラッセルは、存在するものは言葉や文章で気儘に提示される方法から、独立し、かつ異っているとするのである。従って、将来の文法の諸法則は存在論を支配することを許

されないだろうといる。彼はこうして、いわゆる完全な言語とでもいべきものをつくり上げようという考えをやつていった。しかし、彼の論理がますます微妙な特質をあらわしてくるにつれ、証明のためにその論理を用いることが一層困難になった。結局、ラッセルは、すべての論理的仮定は、それが「if」に帰着するということからのみ仮説的なのであるとする。従って存在にかんする究極的な言明は不可能である。論理は科学にかなる種類の存在の証明をもさせることはできない。ただ、少くとも物理的世界についての抽象的な知識に達する唯一の方法として数学をとりこむことによって効果的な論理技術を開発することにあるとした。しかも、そうした場合も、一度に一つの問題が検討されるにすぎないのである。

価値にかんする究極的課題は、従って、このように厳密な科学的な流儀では解決できない。ラッセルはそれらを感情と情緒の領域へと追及してしまう。しかし、科学は、一般的に有効な道徳規準をうちたてることはできない。たとえば、独裁者によってなされる残虐行為を正しくないと、また正しいとも論証しえない。すべての賛否はいつも個人的判断である。これ以後、ラッセルは、彼の個人的感情をもはやくそうとはしなくなった。

ラッセルは一貫した合理論者であって、非合理的な感情や、すべて神秘的、観念論的な傾向に対して、不信の念を抱いている。彼は哲学をいわゆる「啓発の欲求」the desire for edification

から救い出す必要を感じ、哲学を宗教的なドグマから解放せねばならないとした。哲学者の能力とは、まさしく、「真理にたいたする無私的な探究」—— a disinterested search for truth の能力のあるなしにかかっている。「真の哲学者たるものは、すべての先入観をも検討する用意のある人である」とラッセルはのべている。ラッセルによれば、哲学の真の発展は、すべての個人的影響からまぬがれ、また如何なる形においても狂信を捨象した、そ厳密に真らしきものの探究によってこそ果しうるのである。ラッセルの主張によれば、従って、科学哲学は倫理的には中立でなくてはならない。

五

以上によって、ほぼゴットシャルクによるラッセルの哲学の骨格を示しえたであろう。そこに見られるのは明らかに存在するものとそれについての思考との二元論である。思考は存在するものと言語によって結ばれているだけで、決して存在するものに一致することはできない。従って、当然の帰結として価値は実在とは全く異った次元にあるとされる。こうした二元論が導く先は、価値判断を主観的情緒的産物とみなすことによって、その客観的な正当さの根拠が得られる望みを全く断ってしまうことである。ヒットラーのなす残虐行為を悪として論証できないと歎ずるのは、まさにこの二元論に立つ人々である。科学的価値相対主義——このいかめしく、ベダンティックな主義は、

この二元論によって生みおとされ、学者の社会的責任の回避のための恰好のかくれみのを提供しつつある。ゴットシャルクが論ずべきであって、論じなかったという惜しむべき点はまさにこういったところに存する。

ラッセルは自らつくり出した二元論をふまえつつ、「自分の政治的主張は自分の哲学的な立場とは何の関係もない。自分は哲学者としてではなく、あくまで一市民として発言したにすぎない」と様々な場合に述べているがこうした彼の態度は二元論者らしい立場を明らかにしているが、この考え方をもし一般的にとりあげ、すべての政治的主張は、発言者の主観的な見解にしかすぎないとしたならば、いったい、政治思想の客観的有効性などどこにいつて求めたらよいのだろう。こうした見解から「政治思想などというものは、畢竟、力の支配する党派の抗争における権益確保のための体裁のよい口実にしかすぎないのではないか」といったニヒリズムまで、ほんの一步である。

ラッセルの政治的社会的著作に垣間見られる一種の言いようのない物淋しい調子は、もしかすれば、彼のよって立つこの二元論が源泉ではないだろうかと筆者には思われる。しかし、そのことに言及することは、もはや書評の範囲を越えることになるだろう。